

The more you shed tears, the more you grow.
The more you shed tears, the more you grow.
The more you shed tears, the more you grow.
The more you shed tears, the more you grow.
The more you shed tears, the more you grow.

明日を生きる
「自分へのメッセージ」

涙の数だけ大きになれる!

木下晴弘
Kinoshita Haruhiro

涙のおすそわけ

この小冊子を友人・知人・家族、
会社の部下・同僚に
プレゼントして下さい。

詳しくは裏面へ

はじめに

私が人の心を揺さぶる話をするようになったのは、塾講師をしていた時のことでした。

当時、関西で灘高校などの超難関校受験の塾で教鞭をとっていた私は、「どうしたら生徒がやる気になってくれるだろう?」「どうしたら自分からペンを持って勉強してくれるだろう?」ということを日々考えていました。

塾の講師というのも、実際には人気商売で、生徒からの支持が給料に直結する厳しい世界です。そのため、講師もテクニックを磨いています。

しかし、生徒たちはテクニックだけではやる気を起こしてくれませんでした。テクニックよりも大事なものの、それは「心を動かす」ことだったのです。

そのことに気づいてから、私は授業のたびに生徒たちにいろいろな話をしてきました。

「勉強は何のためにするのか」「幸せって何だろうか」「あきらめないこと」「努力の本当の意味」「感謝する気持ち」など、人生で大切なことをいろいろな角度で

伝えました。

そうした話に心を動かされた生徒は、もう何も言わなくても勉強し始めます。そうして、みな第一志望校へ合格していきました。

そして、いつの頃からか「先生、いい話をしてください」と、現在社会人になっている塾の卒業生たちが集まってきました。

ただ、そんな彼らを見ていると、なぜかとても疲れしています。仕事がつらい、仕事をやめたいと私に漏らします。

そんな彼らが求めているのは、直接的なアドバイスではありません。それよりも、かつて私が話したような話でした。

「先生、感動して帰りたいんです」「あの時のやる気をもう一度取り戻したいんです」などと言う彼らに、何とか元気になってもらおうと、いろいろな話をします。

すると「先生、もう少し今の仕事、がんばってみる」と、自分のフィールドへと帰っていきます。

.....

私は現在、過去の経験を生かして教員の方や塾の講

師の方向けに「生徒にやる気を出させるセミナー」をしています。

また、企業の経営者や幹部の方に「社員のモチベーションをアップさせるセミナー」もしています。

おかげさまで、これまでに延べ5万人以上の方と出会い、多くの方が涙してくれました。

人が変わる瞬間というのは、そこに「涙」の存在があります。

あふれた感情は、誰にも止めることができません。しかし、多くの方がそうした感情を押し殺して生きているように思います。

でも私は、そんな涙が人を変えてくれると信じています。

今は苦しくても、どうにもならない状況に置かれても、人は何かのきっかけで変わります。そして、そこには必ず涙があります。

人は、涙の数だけ大きくなれる。

この小冊子から、あなたが何か少しでも感じ取っていただけるものがあれば、私も幸せです。

木下 晴弘

◆ あるレジ打ちの女性

人はしばしば目標を見失い、人生の道に苦しみ悩むことがあります。

しかし、だからといっていつまでも苦しんだままということもありません。人は常に変わることができるのです。

私の仕事上のパートナーで、Tさんという方がいます。Tさんの勤める会社は人材紹介の大手なので、仕事と人との関わり合いの中、いろいろな人間ドラマを目の当たりにするのです。

ある日、そのTさんから聞いた話で私の印象に強烈に残った話がありました。私は、このエピソードに「あるレジ打ちの女性」と名づけました。

.....

その女性は、何をしても続かない子でした。

田舎から東京の大学に来て、部活やサークルに入るのは良いのですが、すぐにイヤになって次々と所属を変えていくような子だったのです。

そんな彼女にも、やがて就職の時期がきました。

最初、彼女はメーカー系の企業に就職します。ところが仕事が続きません。勤め始めて3ヵ月もしないうちに上司と衝突し、あっという間にやめてしまいました。

次に選んだ就職先は、物流の会社です。

しかし入ってみて、自分が予想していた仕事とは違うという理由で、やはり半年ほどでやめてしまいました。

その次に入った会社は、医療事務の仕事でした。

しかしそれも「やはりこの仕事じゃない」と言ってやめてしまいました。

そうしたことをくり返しているうち、いつしか彼女の履歴書には、入社と退社の経歴がズラッと並ぶようになっていました。

すると、そういう内容の履歴書では、正社員に雇ってくれる会社がなくなってきました。

ついに、彼女はどこへ行っても正社員として採用してもらえなくなりました。

だからといって生活のためには働かないわけにはいきません。

田舎の両親は早く帰って来いと言ってくれます。しかし、負け犬のようで帰りたくはありません。

結局、彼女は派遣社員に登録しました。

ところが、その派遣も勤まりません。すぐに派遣先の社員とトラブルを起こし、イヤなことがあればその仕事をやめてしまうのです。

彼女の履歴書には、やめた派遣先のリストが長々と追加されていきました。

ある日のことです。

例によって「自分には合わない」などと言って派遣先をやめてしまった彼女に、新しい仕事先の紹介が届きました。

それは、スーパーでレジを打つ仕事でした。

当時は、読み取りセンサーに商品をかざせば値段が入力できる、今のようなレジスターではありません。値段をいちいちキーボードで打ち込まなくてはならず、多少はタイピングの訓練を必要とする仕事でした。

ところが勤めて1週間もするうち、彼女はレジ打ちにあきてきました。

ある程度仕事に慣れてきて、「私はこんな簡単な作業のためにいるのではない」と考え出したのです。

その時、今までさんざん転々としてきながらそれでも我慢の続かない自分が、彼女自身も嫌いになりました。

もっとがんばらなければ、もっと耐えなければダメということは本人にもわかっていたのです。

しかし、どうがんばっても、なぜか続かないのです。

もっとがんばるか、それとも田舎に帰ろうか。とりあえず辞表だけ作って、決心をつけかねていました。

するとそこへ、お母さんから電話がかかってきました。また田舎に帰ってくるようながされ、これで迷いが吹っ切れました。

彼女はアパートを引き払ったらその足で辞表を出し、田舎に戻るつもりで部屋を片づけ始めました。

長い東京生活で、荷物の量はかなりなものです。あれこれダンボールに詰めていると、机の引き出しの奥から手帳が出てきました。

小さい頃にかきつづった自分の大切な日記でした。なくなって探していたものでした。

そして日記をパラパラとめくっているうち、彼女は「私はピアニストになりたい」と書かれているページを発見しました。

そう、彼女の小学校時代の夢です。「そうだ。あの頃私は、ピアニストになりたくて練習をがんばっていたっけ」と、彼女はあの時を思い出しました。

しかも、ピアノの稽古だけは長く続いていたのです。けれども、いつの間にかピアニストの夢はあきらめていました。

彼女は心から夢を追いかけていた自分を思い出し、日記を見つめたまま、本当に情けなくなりました。

「あんなに希望に燃えていた自分が今はどうだろうか。履歴書にはやめてきた会社がいくつも並ぶだけ。自分が悪いのはわかっているけど、なんて情けないんだろう。そして私は、また今の仕事から逃げようとしている……」

彼女は静かに日記を閉じ、泣きながらお母さんに電

話したのです。

「お母さん、私、もう少しここでがんばる」

彼女は用意していた辞表を破り、翌日もあの単調なレジ打ちの仕事をするために、スーパーへ出勤していききました。

ところが「2、3日でもいいから」とがんばっていた彼女に、ふとある考えが浮かびます。

「私は昔、ピアノの練習中に何度も何度も弾き間違えたけど、くり返し弾いているうちに、どのキーがどこにあるかを指が覚えていた。そうなったら鍵盤を見ずに、楽譜を見るだけで弾けるようになった」

彼女は昔を思い出し、心に決めたのです。「そうだ、私は私流にレジ打ちを極めてみよう」と。

レジは商品ごとに打つボタンがたくさんあります。彼女はまずそれらの配置をすべて頭に叩き込むことにしました。

覚え込んだら、あとは打つ練習です。ピアノを弾くような気持ちでレジを打ち始めました。

そして数日のうちに、ものすごいスピードでレジが打てるようになったのです。

すると不思議なことに、それまでレジのボタンだけ見ていた彼女が、今まで見もしなかったところへ目がいくようになったのです。

最初に目に映ったのはお客さんの様子でした。「ああ、あのお客さん、昨日も来ていたな」「ちょうどこの時間になったら子ども連れで来るんだ」とか、いろいろなことが見えるようになったのです。

それは彼女のひそかな楽しみにもなりました。相変わらず指はピアニストのように、ボタンの上を飛び交います。そうしていろいろなお客さんを見ていくうちに、今度はお客さんの行動パターンやクセに気づいてくるのです。「この人は安売りのものばかり買う」とか、「この人はいつも店を閉める間際に来る」とか、「この人は高いものしか買わない」とかがわかるのです。

そんなある日、いつも期限切れ間近の安い物ばかり買うおばあちゃんが、5000円もする尾頭付きの立派

な鯛をカゴに入れてレジへ持ってきたのです。

彼女はビックリして、思わずおばあちゃんに話しかけました。

「今日は何かいいことがあったんですか？」

おばあちゃんは彼女ににっこりと顔を向けて言いました。

「孫がね、水泳の賞を取ったんだよ。今日はそのお祝いなんだよ。いいだろう、この鯛」

「いいですね。おめでとございます」

うれしくなった彼女の口から、自然な言葉が飛び出しました。

お客さんとコミュニケーションをとることが楽しくなったのは、これがきっかけでした。

いつしか彼女は、レジに来るお客さんの顔をすっかり覚えてしまい、名前まで一致するようになりました。

「〇〇さん、今日はこのチョコレートですか。でも今日はあちらにもっと安いチョコレートが出てますよ」「今日はマグロよりカツオのほうがいいわよ」などとやってあげるようになりました。

レジに並んでいたお客さんも応えます。

「いいこと言ってくれたわ。今から替えてくるわ」

そう言ってコミュニケーションをとり始めたのです。

彼女はだんだんその仕事が好きになってきました。

そんなある日のことです。

「今日はすごく忙しい」と思いながら、彼女はいつものようにお客さんとの会話を楽しみつつレジを打っていました。すると店内放送が響きました。

「本日は大変に混みあいまして申し訳ございません。どうぞ空いているレジにお回りください」

ところがわずかな間をおいて、また放送が入ります。「本日は混み合いまして大変申し訳ありません。重ねて申し上げますが、どうぞ空いているレジのほうへお回りください」

そして3回目、同じ放送が聞こえてきた時に、はじめて彼女はおかしいと気づきました。

そして、ふと周りを見渡して驚きました。

どうしたことか5つのレジが全部空いているのに、お客さんは自分のレジにしか並んでいなかったのです。

店長があわてて駆け寄ってきます。

そしてお客さんに「どうぞ空いているあちらのレジへお回りください」と言ったその時です。

お客さんは店長の手を振りほどいてこう言いました。

「放っといてちょうだい。私はここへ買い物に来てるんじゃない。あの人としゃべりに来てるんだ。だからこのレジじゃないとイヤなんだ」

その瞬間、彼女はワッと泣き崩れました。

その姿を見て、別のお客さんが店長に言いました。

「そうそう。私たちはこの人と話をするのが楽しみで来てるんだよ。今日の特売はほかのスーパーでもやってるよ。だけど私はこのおねえさんと話をするためにここへ来ているんだ。だからこのレジに並ばせておくれよ」

彼女はポロポロと泣き崩れたままレジを打つことができませんでした。

はじめて、仕事というのはこれほど素晴らしいものなのだと気づいたのです。

そうです。すでに彼女は、昔の自分ではなくなっていたのです。

.....

それから、彼女はレジの主任になって、新人教育に携わったそうです。

彼女から教えられたスタッフは、仕事の素晴らしさを感じながら、今日もお客さんと会話していることでしょう。

その後、彼女の履歴書がどうなったかは、誰も知りません。

◆ ある生徒の高校受験

塾講師という仕事は、生徒に受験に合格してもらうことがゴールです。しかし、私は生徒たちに人生のゴールは別のところにあるということを教えてきました。

では、人生のゴールとは何でしょうか？

それは幸せな生活が送れることだと思います。塾に行かせる保護者も、ともすればこのことを見失いがちです。

親は子どもが生まれた瞬間、いい学校に入って、いい就職をしてなんて考えなかったはずです。

五体満足で、人から好かれ、感謝され、少しばかりのお金があればいい。そして、何より本人が幸せを感じて生きてほしいと。

仕事も同じです。今の仕事をやめたい、つらいと思っている人も、その仕事で成果を出すことがゴールではありません。そのプロセスを通じて、自分の幸せをつかんでいくのです。

次の話は、私が実際に経験したことです。私はこの生徒に出会い、人生で大切なものを学ばせてもらいました。

そんな少年のお話です。

.....

私が講師になってまだ間もない頃の出来事です。

私はある1人の生徒に出会いました。名前はS君といいます。

S君は、確か中3の6月頃に途中入塾してきた生徒でした。ただ彼は、ちょっと変わったところがあって、私の第一印象は良くなかったのです。

何しろ授業の時、机にノートを出さない、宿題を出してもノートにやってこない、数学の問題をノートを使わずにテキストの余白でチョコチョコ計算するので、計算ミスばかりする。要するにノートをいっさい持ってこないのです。

私はS君を呼びつけて言いました。

「ノートはどうした？ 黙っていたらわからないだろ」

それでも黙っている彼に、私の口調もつい荒くなりました。

「ちゃんと言え。どうしたんだ、ノートは？」

S君は黙って下を向いたままでした。仕方なく、次からノートを持ってくるよう約束させ、私はその場を収めました。

ところが翌日、やはりS君はノートを持ってきませんでした。そして、その翌日も……。私も頭にきて、彼に怒鳴りつけました。

「そうやって、おれに反抗する気なんだな。よしわかった。先生がノートをやるよ」

そう言って、500枚くらいあるコピー用紙のワンカートンをバンッと机に投げ出しました。

「これで文句ないだろ！ これに宿題を書いてこい！」

すると、S君は「ありがとうございます」と礼を言うのです。

私は拍子抜けして「何なんだろう、こいつ」と思いましたが、次の日はコピー用紙に宿題をやってきました。

7月に入り、暑くなってきた頃に、今度はクラスの生徒がS君を何とかしてくれと訴えてきました。

ずっと同じヨレヨレのTシャツとジーパンを着てくるので、それが匂うというのです。そういえば、入

塾した時もまったく同じ服だったことを思い出しました。

「S君、お前な、不潔だろう。ちゃんと着替えてきなさい。キッチリした生活がキッチリした受験生活につながり、合格につながるんだ。ところで、S君はどここの学校に行きたいんだ？」

私は彼の行きたい高校も知らなかったもので、ついでに聞いてみました。すると、彼がぼそりと言いました。

「K学院に行きたい……」

「お前、K学院っていったら難関中の難関じゃないか。そんな生活態度でどうする？」

こう論じたのですが、結局、服装は今まで通りあらたまりません。クラスの生徒たちは、彼の周囲を避けて座るようになっていました。

私は、夏前の保護者面談の際、S君の状態をきちんと保護者の方に話しておかなければと思いました。

そして、面談の当日、お母さんがやって来ました。

片側にS君の小さな弟を連れていました。お母さんの姿はというと、髪の毛は乱れ、着ている服もくたびれています。

「いつもお世話になっています」

私はあいさつをするお母さんに、ノートを持ってこないこと、同じ服を着て非常に迷惑がかかっていることなどを説明しました。すると、お母さんはポツリポツリと話し出しました。

「あの子は小学校の時から、この塾に通って勉強して、K学院に進学したいと言っていました。それがあの子の夢なんです。でも先生、大変申し訳ないのですが……うちにはお金がありません」

S君の家は、お父さんと死別して経済的に苦しい状況にあるということでした。それ以来ずっと、お母さんは看護師の仕事をし、女手ひとつで子どもを育ててきたのです。

私は何も言えなくなりました。

「先生、本当は中学に上がったら、すぐこちらに来させたかったんです。でもお金がなくて中3になったら行かせてやると言って我慢させ、2年間ギリギリの生活をして、中途だけどやっと入塾させることができませんでした。ノートも持たせず、迷惑をかけて申し訳ありません。

ただ息子は、先生からコピー用紙をいただいて喜んで使っています。本当にありがとうございます」

私は1分以上、頭を上げられませんでした。

そして、S君にも謝りました。

「ゴメンな。おれを許してくれ。先生は全然知らなかったんだ。だけど、お前も人が悪いぞ。言ってくれば良かったのに。ノートも着るものも大変なのか……」

私の塾に来ているような難関校を受ける子どもは裕福な家庭の子が多いのです。新品の筆記用具や文房具をなくしても、すぐに新しいものを買直すので、誰も探そうとしません。そこで私は、落として1カか月以上過ぎたものを全部もらい、S君に用立てました。

「これでごんばれ。ノートも先生が持ってくるからな」

S君のうれしそうな顔がそこにありました。

彼は、この塾で勉強するのが夢だったというくらいです。とても熱心な子でした。ほかの子は参考書を何種類も買ったりしているのに、S君は1冊しか持っていません。だから、その1冊を徹底的に何回

もくり返して勉強します。

そして、だんだん紙がまくれ上がっていき、端が何倍にも厚くなっていました。私が1枚ずつはがれてボロボロになったその1冊をセロハンテープで補強してあげると、彼はまた喜んで使っていました。

とはいえ、K学院を狙うライバルはみな、中1からガッチリ勉強してきた秀才ばかりです。彼はふつうの公立中学でしか勉強していないし、それも中3の6月から塾に入っています。ライバルたちからはすでにかなり水をあけられていて、入塾時の成績はほとんどビリに近い状態でした。

しかし授業への意欲はすごく、絶対に授業を休まない、たとえ熱が出て体がつらい時でも必ず出席しテストを受ける、毎日夜遅くまで残り、食い下がるように私にしつこく質問をして帰って行くのです。

私はS君だけをひいきしないよう、ほかの生徒に気遣いながら彼を夕方4時に来させるようにしました。

授業は7時からなので、私の授業の準備時間を除いても2時間は直接教えることができます。彼も喜んでやって来ました。

さらに授業が終わったあとは居残りをさせ、11時頃まで指導しました。するとだんだん成績が上がり、9月終わりのテストでは、700人中なんとベストテンに入るまでになったのです。最初の成績を考えると信じがたい伸びでした。

ただ、K学院を確実に狙うには、今までやってきた基本レベルの問題だけではなく、最高水準の問題を勉強する必要があります。いくら彼のように基本問題で100点を取っても、K学院の入試には歯が立ちません。

しかし、新しい参考書を買う余裕がないのを私は知っています。私は今回だけは、こっそり最高水準問題集を買って渡すことにしました。

ところがS君は、わずか1週間ほどで全部仕上げてきてしまったのです。それも3回やってきて、質問まで用意していました。

できる子というのは、質問自体がとてもの確です。「この問題はここまで考えて、こうしてやってみただけ、どうしても答えが合いません。ここからこの間にミスがあると思うのですが、どこが間違っていますか？」

S君のような質問をされると、こちらとしても熱が入るし教えやすいのです。

考え方の筋道を解説したうえで、「こうひねるとこういう問題に変わる。そうしたらこの部分が違ってくるので気をつけなさい」と、応用的な説明までできるのでますます学力がつきます。

S君はさらに力をつけ、絶対に合格間違いなしというレベルに到達しました。

そして年が明け、入試当日がやってきました。

塾あげでの激励のために私がK学院で待っていたところ、S君が誰よりも早くやって来ました。

試験開始まで1時間以上もあります。

「こんな早く来て、アホだな」と言いながらS君を見ると、彼の体が震えていました。それもそのはず、学生服の下は夏のTシャツ1枚だけだったのです。

私は塾で用意した使い捨てのカイロを、彼のポケット全部に押し込み、彼の右手をさすりながらこう言しました。

「今日の試験を受けるお前にとって、右手は神の手だ。絶対に右手だけは大事にしろ。かじかんだら答えも書けないぞ」

K 学院の試験は 2 日間にわたって行われます。S 君は翌日も一番に現れて、試験は無事終了しました。

出来はどうだったかと聞くと、「わからない」という答えが返ってきました。

合格発表の当日。

私は定刻より早めに K 学院に行きジリジリ待っていると、時間ピッタリに合格者の名前を書いた紙が貼り出されました。

K 学院では番号ではなく名前を表示します。

私は真っ先に S 君の名前を探しました。

—— あった！ S 君の名前があった！

掲示板には合格者全員の名前が貼り出されましたが、その時の私には、S 君の名前だけで十分でした。

そのうち、塾の生徒たちが集まり始め、合格に喜んだり落ちて泣いたりして、毎年恒例のシーンがくり広げられました。

私は S 君に祝福の言葉をかけるつもりで待っていました。しかし、彼はなかなか来ません。冬の夕方は

すぐに日が落ちます。真っ暗になって人がほとんどいなくなっても、S 君は来ませんでした。

私はその日の授業をほかの先生に代ってもらい、彼を待ち続けました。

S 君が来たのは 7 時過ぎでした。

暗い照明にポツンと 1 人、その後ろには、お母さんと弟の姿が浮かんで見えてきました。あとで聞いたら、お母さんの仕事が終わるのを待って来たということでした。

まさか私がそんな時間まで待っているとは思わなかったらしく、S 君はビックリしていました。

「遅いじゃないか」

「……先生、どうでした？」

「何を言ってる。お前がやった結果だろ。自分で確認してこい。掲示板はあっちだ」

S 君はすぐに掲示板に走って行きました。私が厳しい顔をしていたので落ちたと思ったようでした。

私はそのあとやって来たお母さんに、「おめでとうございます。受かってますよ」と言うと、「先生、ありがとうございます」と言うなり、目から涙があふれ出しました。

私はすぐに S 君を追いかけていくと、彼は掲示板

の前でうずくまって泣いていました。

「やったな！良かったな！これでお前は4月からK学院の生徒だな！」

するとS君は立ち上がり、私にこう言ったのです。

「先生、僕はK学院には行きません。公立のT高校でがんばります」

私は一瞬、頭の中が真っ白になりました。

確かに、T高校は公立の高校としては当時も今もトップの座にある高校です。そうはいうものの、K学院を蹴ってT高校に入るとは……。

しかしその時、私はすべてを悟りました。

結局、そのあと私に重ねて礼を言いながら、S君たちは会場から帰っていきました。後ろ姿を見送る間、私は喉の先まで「K学院の学費、出してやるから」という言葉が出かかっていた。

しかし、それを言うことはできませんでした。

失礼とか何とかというわけではありません。彼ら家族のすべてが尊いと思え、そんな人たちには必要がないと思ったのです。

S君は最初からK学院に行けないことがわかって

いました。それでもすさまじいがんばりで勉強し、そして、合格してみせたのです。

このうえなく尊いと思いました。そして、彼に好きなようにさせてやったお母さんも尊いと感じました。

私の塾講師生活の中で、さすがにあとにも先にも、K学院を滑り止めにして公立高校に行った生徒はほかに1人もいません。難易度でいえばK学院は灘高校に匹敵します。東京なら開成高校クラスです。

灘や開成を滑り止めにして公立トップの進学校に入るなんて考えられるでしょうか？

3年後、うれしい記事を見つけました。

東大と京大の合格者一覧を週刊誌が掲載し、その中にS君の名前を見つけたのです。K学院の合格発表の時以来、連絡を取り合うことはありませんでしたが、「S君、やったな！」と思いました。

K学院に行かないと聞いた瞬間、私は力が抜けたことを思い出しました。

しかし、「何で？」と言いかけて、ハッと気づいたのです。私はその時、S君にかけた言葉を反芻していました。

「そうか、わかった。そういう人生もあるよな。いいかもしれないな。それにしてもお前はお母さん孝行だね。がんばるんだぞ。つらいことがあったら、いつでも先生に言ってこいよ」

あれ以来、今日まで互いに連絡はありません。

でも、それでいいと思っています。強い人間は連絡などしないものです。私が心配するまでもなく、強く、しっかりと彼は生きています。

大学合格の記事が、それを証明してくれたのです。

.....

あなたはS君に何を感じたのでしょうか？

私は彼との出会いを通して、人生を全力で生きるということの意味を学びました。

どんなにつらい時でも、どんなにくじけそうな時でも、人生に失敗なんてない。全力で生きる時、人は輝いているのです。

あなたも全力で生きていますか？

〈著者プロフィール〉

木下晴弘（きのした・はるひろ）

1965年、大阪府生まれ。株式会社アビトレ会長。

学生時代に大手進学塾の講師経験で得た充実感が忘れられず、銀行を退職して同塾の専任講師になる。生徒からの支持率95%以上という驚異的な成績を誇り、多くの生徒を灘高校をはじめとする超難関校合格へと導く。

「感動が人を動かす」をモットーに、学力だけではなく人間力も伸ばす指導は、生徒、保護者から絶大な支持を受ける。以後10年にわたり、講師および広報・渉外・講師研修などさまざまな業務に携わる。

2001年に独立し、株式会社アビトレを設立。最前線で教鞭を振ってきたノウハウをもとに、全国の塾・予備校・学校で、「感動授業開発セミナー」「子どもたちがやる気になるセミナー」「保護者の魂を揺さぶるセミナー」など行う。

さらには企業向けに「スタッフのモチベーションを高めるセミナー」も実施。受講者は2007年末現在で5万人を超え、「泣けるセミナー」として大きな注目を浴びている。

著書に、『ココロでわかると必ず人は伸びる』（総合法令出版）、『できる子にする「賢母の力」』（PHP研究所）などがある。

アビトレホームページ <http://www.abtr.co.jp>

【編集協力】佐野浩一（株式会社本物研究所 代表取締役社長）

【カバーデザイン】Panix

【DTP】株式会社システムタンク

涙の数だけ大きくなれる！

著者 木下晴弘

発行者 太田宏

発行所 フォレスト出版株式会社

〒162-0824 東京都新宿区揚場町2-18 白宝ビル5F

電話 03-5229-5750

振替 00110-1-583004

URL <http://www.forestpub.co.jp>

印刷・製本（株）シナノ

©Haruhiro Kinoshita 2008

**5万人が泣いたセミナーから
涙の話が本になります！**

9月上旬発売決定！

**『涙の数だけ
大きくなれる!』**

～明日を生きる「自分へのメッセージ」～

木下晴弘・著

予価 1365 円 (税込)

ISBN978-4-89451-314-3

160 予ページ

定価は変更になることもございます。ご了承下さい。
この小冊子に関するお問い合わせは、フォレスト出版までお願いします。

TEL: 03-5229-5750 (稲川・土屋)

お近くの書店にてご予約下さい。

(別紙にあります予約注文書をそのまま書店にお持ち下さい)